

前までのあらすじ

流遠るとおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまふ。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘たちばなアサト、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。彼等はゼヘナを危機に陥おとしれている別の敵性体——〈ブレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。

だが、彼等の準備が整いつつあつたタイミングで、〈ブレケース〉が各地で撤退を始めた。それは状況が次の段階へと移行しつつあるのかもしれない、というファフロウ姉妹の意見を、しかし中央政府は取り合わなかつた。

彼等は一刻も早く非常事態を解除し、ストレスに晒さらされ続ける状況から解放されたかつたのだ。

すでに危機は乗り切つた。

我々は敵の脅威を退しりぞけたのだ——と。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

現生の野生動物と太古の恐竜。

例えば、百獣の王ライオンと暴君蜥蜴の王ティラノサウルス。この二体の戦い——実際の大きさや生態、環境の違いなどは無視するとして——は、少なくとも男の子であれば、誰もが夢想した事があるだろう。

地球であれば生きた時代が異なるため、両者の対決はありえなかったが、ゼヘナではその限りではない。

そう——機獣であれば、両者の戦いはいくらでも存在した。

正確な記録こそ残されていないが、蒼いライオン型の機獣と、紅いティラノサウルス型の機獣は、宿敵として何度も、数えきれない戦場で相見え、いくつもの伝説が語り継がれた。

そんな機獣すら過去の遺物となった現代のゼヘナだが、その魂は受け継がれ、今も人間と共に戦場を駆け抜けている。

〈機獣少女〉の相棒——MBデバイスとして。

「〈両断するもの〉——その威を示せ！」

黒い和服を纏った少女が吼え、手にした得物を振り下ろす。それは可愛らしい少女が振り回すには不釣り合いな、機械的で巨大な、カタナのような剣だった。黒光りする刀身部分は紅い光を帯び、幅は約五十センチ、長さは約六メートルにも及ぶ『新たな刃』を形成しており、遠目にはレーザー光線が奔ったようにも見えただろう。

しかし、振り下ろされた長大な紅い刃は標的に触れる事叶わず、ただ地面を抉り、土砂を盛大に撒き散らすのみに終わった。

まだ伸びきらぬ手足。武器を振り回すようには出来ていないであろう華奢な細腕。

当然だ。まだ小学六年生の少女なのだから。

だが、そんな年端も行かぬ少女を戦士に変えるのがMBデバイス——機獣のコアの欠片が納められた、戦うための武器である。和服の少女のMBデバイスは狼型の機獣のコアの欠片が納められているらしく、彼女の頭頂部と腰部には、狼を思わせる耳と尻尾が生えていた。

もつとも、こういった特徴が表面化する事は極めて珍しい例だが。

「——ッ！」

長大な紅い刃による斬撃をかわした標的——やはり少女だ——が、突入コースを変えて再び突っ込んでくる。黒いドレスを風になびかせ、背部の巨大なウイング・ユニットから推進力を得て、空中を滑るように飛行するその動きは、地を這う獣のそれではない。

ドレスの少女は知っているのだ——自分が飛べる存在である事を。

「でええええええいッ！」

和服の少女は、地面に半ば埋まった紅い刃を強引に持ち上げ、その切っ先をドレスの少女に向けようとする——が、間に合わない。ドレスの少女は右手の巨大な爪で和服の少女の得物を押さえ、左手の爪を喉元に突きつけた。

だが、和服の少女は諦めない。剣の刀身に発生させていた紅い刃を消す事で、ドレスの少女の爪の拘束を逃れ、喉元に突きつけられた爪を柄に発生させた十手のような黄色い光の刃で弾き返した。

和服の少女は返す刃で、刀身部分を掬い上げるようにドレスの少女に斬りかかるが、慎重な性格なのか、相手は即座に離脱。一瞬で近接戦闘の範囲外にまで離れてしまった。

そのまま様子を見るように空中を遊弋する様は、古代の翼竜を彷彿とさせるが、彼女のMBデバイスに納められたコアの欠片の機獣は、翼竜型ではなくティラノサウルス型だ。陸戦型の機獣のほとんどが四足や二足歩行であるのに対し、ティラノサウルス型の機獣はホバー走行が通例となっていたらしい。中でも、一握りの高出力な機体に関しては、飛行と呼んでも差し支えないレベルの機動を実現したという。

姿は違えど、狼とティラノサウルス——相對するはずのない二頭の獣が、少女の姿を借りて此処に対峙していた。

「はああああッ！」

「——ッ」

何か両者の間にきつかけがあつたのか、一瞬で互いの距離がゼロになる。降下のエネルギーを利用した、ドレスの少女による急加速。和服の少女は両足で大地を踏みしめ、全身でそれを受け止めた。

剣と爪が接触し、怒濤の打ち合いが始まる。ドレスの少女は爪が両手にあるため、手数を活かして攻めるが、和服の少女は焦らず、確実に爪による連撃を捌いていく。

やがて——

「——点 火——」

『First bullet』

和服の少女が叫ぶと、彼女の得物が応じるように機械音声を発した。

「？」

本能的に危機感を覚えたのか、ドレスの少女はすぐさま後方に跳んで——スカートの中に一瞬見えた噴射口による逆噴射だろう——和服の少女の間合いを離れた。

和服の少女が剣を大振りするが、すでにドレスの少女は離脱しており、炎を纏った刀身

は空気を斬り裂くのみだった。

見れば、剣の握り手近くにある三つの突起の一つが、押し込まれたような位置に移動している。先ほどの機構を作動させた結果だろう。

「……………」

上空——といっても十メートルほどだ——を旋回するドレスの少女を目で追い、和服の少女は機会を待つ。攻撃手段がないではないが、自分の技量と相手の速さを考慮すると、まず当たらないと判っているのだ。

「——！」

上空で光が見えた。

旋回しているドレスの少女が発した光だ。

それは球状で、こちらに向かって飛んでくる。バスケットボールくらいの大きさだと判ったのは、かわしたそれが今まで立っていた地面に激突した瞬間で、すぐさま威力へと姿を変えた。

爆発したのだ。

ドレスの少女が放った光弾——それは荷電粒子砲である。本来は『光線』として照射される武装だが、ドレスの少女はプラズマ光弾のように単発での発射が可能らしい。

しかも——

「ひゃあッ!？」

和服の少女が素っ頓す とんきょう狂きやうな声を上げる。

無理もないだろう。頭上から次々と、先ほどの光弾が連続で降り注げば。

爆撃のように無慈悲に降り続く光弾の雨。続く爆発。

けたたましい爆音まぼゆと眩まぼゆい光が、和服の少女を覆おほい隠した。

「……………」

やりすぎたかもしれない。

旋回をやめ、滞空状態で地上を見下ろしていたドレスの少女——クラウド・P・ブランは、今まさに自分の攻撃によって見えなくなった友人を想って後悔していた。炎を発生させた剣を警戒して、相手の反撃不能距離アウト・レンジからの狙い撃ちに切り替えたのだが……。

起動試験を経て、クラウドは正式な《機獣少女》となった。

今回が、姿を変えて《ラインハイト》という名を与えられたMBデバイスを使った、初めての模擬戦。

緊張はあったが、それ以上に興奮もしていた。

「……う……ものに対する憧れはあったから。

だから、自分の力の使い方が判ってしまっって、少しばかり調子に乗っていたのかもしれない。

「や、やみひめ……?」

数発ばかり撃ち込んだ荷電粒子のプラズマ光弾によって、爆発が起き、大量の砂塵が撒き散らされ、MBジャケットがなければ耐えられないような高温に見舞われている周囲の状況に、クラウは血の気が引いていくのを自分でも感じた。

「嘘……そんな……」

こんな状況で生存可能な生物など存在しない。皮膚は焼け、呼吸もままならず、そもそも爆発の衝撃でショック死しているだろう。

「……………やみひめッ!」

クラウの悲痛な叫びが木霊する。地上にいた和服の少女——やみひめと比べ、明らかにいくつも年上で、瀟洒な黒いドレスを着こなしているように見えても、彼女もまた小学六年生の少女にすぎない。見た目が早熟で内面も大人びているが、それでも——

「……?」

ようやく地上の様子が落ち着き、爆心地が明瞭に見えると、一人の少女がこちらに向かって手を振っているのが見て取れた。普通の小学六年生らしい小柄な体躯を包む、黒い和服。手を振る動きに合わせて揺れる黒いポニーテール。

クラウの友人——流遠やみひめだった。

「ふえっ!」

何やら上空から友人の呼びかけが聞こえて、それが妙に切羽詰まった感じだったので、応える意味で手を振ったのだが——音速の如きスピードで降りてきた彼女を受け止める羽目になるとは、やみひめも思わなかった。

「うわっ」と——

〈機獣少女〉——MBジャケットを纏い、肉体が強化された状態——である今、自分より長身のクラウを受け止めるくらいは何でもないが、多少、驚きはした。勢いがついていた事もあるが、それ以上に——

「よかった……無事で……うっ」

友人が泣いていたから。

「ど、どうしたのクラウ……?」

「だって、地形変わっちゃってるし! 私、やりすぎちゃって、またやみひめに、ひどい事しちゃったんじゃないかって……!」

顔をくしゃくしゃにして、自分を見上げるクラウを宥めつつ、やみひめは周囲の惨状を見渡す。確かに、生身であればまず生きてないだろうなと思える光景だ。

「大丈夫だよ。危ないと思って、すぐに〈護るもの〉を展開して防いだから。ほら、ぴんぴんしてる!」

わざと大袈裟に両腕を大きく動かして、やみひめは健在ぶりをアピールする。

「……………危ないと思っただよね」

「え? うん……」

「ごめんね! ごめんなさい! うう……」

「だ、大丈夫だって!」

長身で、美人で、頭も良く、だけど本当は普通の同い年の友人に手を焼きながら、やみひめは内心で安堵していた。

まるで地球に——改変前の世界にいた時と、少しも変わらないやり取りが嬉しかったから。



「よしよし。クラウ、よくがんばったねえ」

「……………ロゼット、恥ずかしい——」

金髪の妙齢の女性に頭を撫でられながら、しかしクラウは口で言うほど嫌がってはおらず、むしろ照れ隠しである事がバレバレだった。

「やみ子ちゃんも、おつかれさま。良いデータが取れたよ」

そう言つて、金髪の女性——ロゼット・コダールは、やみひめの頭にも手を乗せ、ポニテールが崩れないように優しく撫でた。

「えへへ」

やみひめの素直な反応に、ロゼットはにこりと微笑み返す。それを見て、クラウはクラウで葛藤があるらしく、忙しなく表情を変えていた。

「解析からさっそく模擬戦してもらった訳だけど、すごいね二人とも。明らかに普通の〈M B ジャケット〉の性能を凌駕してる。いつそ逸脱しちゃってる」

先ほどの演習場から管制塔に移動し、ロゼットの待つ管制室に入るなり褒められたかと

思えば、すでに模擬戦でのやみひめとクラウの評価は始まっていたらしい。二人は少しだけ居住まいを正したが、すぐに「リラックスしてくれていいよ。あ、好きな飲んでね」と、ロゼットが用意してくれていた飲物を口に含んで、すっかり緊張状態を解かれていた。「クラウの〈ラインハイト〉は汎用性を高めつつ、より高機動性と攻撃ハイマニューバ オフエンスに特化した感じだね」

飛行を可能にするほどの推進力に加え、加速性能と運動性能の両立。それらを殺さない、ギリギリまで出力を高めた武装。奇跡のようなバランスの上に成り立つ装備だが、真に評価されるべきは使い手であるらしい。

「よく使いこなせるね。あんなアクロバティックな動きして、気持ち悪くなったり、意識が飛んじやったりしない？」

「うん。平気だけど」

ロゼットの疑問に、クラウは事もなげに答えた。〈機獣少女〉の肉体は、MBジャケット展開時に強化される。厳密には、戦闘に適した身体からだに書き換わる。それでも、人間としての域を超えられる訳ではない。やはり限界はあるのだ。

「そう。肉体強化だけじゃ説明がつかないんだけど……慣性制御 もしくは別の——」
ぶつぶつと思案するロゼットの姿は、普段のほわっとした雰囲気と違い、いわゆるイメージの中の科学者然としていた。

「ロゼット、なんだかちよつとカッコイイね」

「……うん」

やみひめの言葉を受けて、クラウはどこか誇らしげに答えた。

「あ、ごめんごめん。まだまだ調べてみたい事はあるけど、とりあえずまあ——クラウの方は問題なさそうだね」

次はやみ子ちゃん——と前置きして。

「ヤタガラスの場合、MBジャケットそのものに特筆するような機能はなくて——というか、〈ラインハイト〉みたいに装備がたくさん付いてる方が珍しいんだけどね」

「はあ……」

「ああ、ちゃんと説明するね。装着者を保護するための機能はあるんだけど、やみ子ちゃんが戦闘で使ってる固有スキルって言えばいいのかな……それはあくまで、やみ子ちゃん自身に依存するもので、MBジャケットの機能じゃないんだ」

ロゼットの説明に、しかしやみひめは疑問顔だ。

「率直に言うと——やみ子ちゃんは『機獣少女 っぽいなにか』であって、〈機獣少女〉じゃないんだよね」

「え……?」

ロゼットの言葉に反応したのはクラウだ。対して、二人の視線を受け止めるやみひめは、複雑そうではあるが、理解もしている——そんな表情を浮かべていた。

「やみ子ちゃんは自覚があるみたいだね」

「……うん」

ロゼットの問いに、やみひめは静かに頷く。何も隠す事はないし、後ろめたい事もない。そんな様子だ。

いつになく真剣なロゼットと、凧いだ水面のように落ち着いた表情を浮かべるやみひめ。両者の間でおろおろするクラウ。

しかし、そんな緊張感は一瞬で終わりを告げた。

「——じゃあ、この話はこれで終わり」

ロゼットは普段のほわっとした口調でそう言った。

「え? 終わりって……?」

クラウはきよとんとした表情を浮かべ、やみひめも似たような表情をしている。

「私の能力の事とか、〈ヤタガラス〉の事とか、気になるんじゃないの……?」

「うん。本当はすごく興味がある」

ほんの少し警戒するようなやみひめの問いに、ロゼットは好奇心を隠す気はないようだ。

「でも、訊かない」

「どうして?」

ロゼットは「うーん」と少し考え、続けた。

「技術者として一番大切な事——私は、それって倫理観だと思うんだ」

「倫理観……」

「そう。人として踏み越えちゃいけない一線、そこで踏みとどまれるかどうか。その判断が出来るかどうか。それが倫理観」

人間は好奇心の生き物だ。それがあるから文明を発達させてこられた。

だが、人間の発明や発見は素晴らしいものだけだったか?

いな
否だ。

取り返しのつかない悲劇を起こした事などいくらでもある。

地球でも、ゼヘナでも。

「正直に言えば、私はやみ子ちゃんの事をもっと調べたいし、〈ヤタガラス〉を徹底的に分解

して解析したい」

でも——

「でも、それをしてしまったら、私はもう人間じゃなくなっちゃう」

それはきつと——

「だから、やみ子ちゃんが自分の力とMBデバイスの事を判ってるのなら、この話はここまです」

きつぱりと言い、ロゼットは微笑んだ。

恐らく、口で言うほど彼女は割り切れてはいない。彼女は技術者だ。高名な〈ロゼット・コダール〉を襲名するほどの才媛だ。知的好奇心には抗い難いだろう。

それでも人間として正しくあるうとするロゼットを、やみひめは好ましく感じたし、クラウはやはり誇らしく感じた。

「それにしても、二人とも本当に何の訓練も受けてないんだよね？」

不意にロゼットが、やみひめとクラウに疑問を投げかけた。これは二人が昨日、ゼーナに来た時点で訊かれた質問だ。ゼーナでは、適性のある少女が訓練を受けて〈機獣少女〉となる。才能に依る部分が大きいとはいえ、やはり最低限の訓練は行わなければ、戦闘行為など出来はしない。

「私はツバキにちよつと教えてもらったくらいで」

「私も、別に格闘技とかの心得はないけど……」

やみひめもクラウも、一般的な日本の女子小学生として暮らしてきた。現代日本の教育課程において、必修科目に『戦闘技能』などないし、徴兵制も存在しない。

「それにしては二人とも動けてるんだよね。相性が良いと、MBデバイスの使い方から戦い方まで、一瞬で理解出来ちゃう子も稀にいるんだけど……なんて言うのかな、二人はまるで、最初から自分の一部みたいにMBデバイスとジャケットを使ってるっていうか」

ロゼットは言葉を区切り、

「まあ何が言いたかったというところ——とにかく、すごい。うん。それだけだよ」

と、本当にすごいんだかなんとか判らない締め方をした。

「えつと……褒められてるんだよね？」

「うん。多分……」

困惑しながらも、やみひめとクラウは好意的な評価として受け取る事にしたらしい。

「——あ。関係あるかどうか判らないけど、ゼーナに来た時、すごく懐かしい感じがした」

「懐かしいって？」

やみひめの発言にロゼットが興味を示す。

「私も。風景とか、空気とか、匂いとか……なんだか、知ってる気がした」

「クラウも？　へえ……」

地球から来たやみひめとクラウ。

ゼヘナの人間であるロゼットからすれば、二人は異邦人になる訳で、その辺りも気にはなっていた。

「二人は、今のゼヘナの人間が地球人との混血だつていうのは知ってる？」

「ツバキから聞いたよ。大昔に地球人の宇宙船が何かの不時着して、そのまま定住したつ」

「え？　でも、惑星間航行が出来る技術なんてないし、大昔つて……」

ロゼットの問いに、事前に知識のあったやみひめは冷静に答えられたが、そうでないクラウは困惑の表情を浮かべていた。

「その辺も齟齬があるみたいだね」

そう言つて、ロゼットはざつとゼヘナと地球の関係を説明した。対して、やみひめとクラウは地球の状況と科学力について聞かせた。

結論としては、ゼヘナには大昔に地球人が来ているはずだけど、やみひめ達の地球にそんな科学力はない——だった。

ちなみに、やみひめは以前にも同じような会話をしている。出会ったばかりの頃に、ツバキと（カグツチ）と一緒に。その際は『転移した際に時間移動もして、過去の地球に来た』とか、『此処は平行世界の地球なんじゃないか』とか、『偶然、同じ名前だけど、この星はゼヘナとは関係のない地球』等々、可能性を挙げる事しか出来なかった。

当然と言えば当然だが。

「なるほどね。うん、面白いね」

さすがは技術者と言ふべきか、不可思議な事があれば不安になるのではなく、解明したいと考えるのだろう。ロゼットは子供のような無邪気な笑みを浮かべていた。

地球とゼヘナ。

転移によって生まれた出会いと矛盾。

それは——

第二十五話

『シュウエンノシシヤ』

正午過ぎ。

昼食を摂るにはちょうどいい時間帯だが、誰もがそういう気分でもなかったため、一同は屋台で軽食を買い、付近の公園のベンチに腰を下ろしていた。大通りに出れば繁華街だが、少しメインストリートを外れば、静かな場所は意外と多い。

「……美味しい——」

思わず——といった様子で、橘アサトは言葉を漏らした。彼は手にしたクレープをまじまじと見つめ、もう一度、口に含んだ。

傍目には無表情のままに見えるが、彼の事を少なからず知っているツバキの目には、ご満悦に見えた。

「なかなかでしょう?」

「いや、むしろ絶品だ」

自信はあったが、予想以上に気に入ってもらえたらしい。アサトは無言で残りを堪能し、ツバキはそれを横目で眺めつつ、自身も手元のクレープを口に運んだ。

ストロベリーの仄かな酸味とクリーム甘味が、ほどよいバランスで口内を満たしているのを感じる。こちらも美味しい。

クラスメイトのスマレ・ヒノカゲと、校則違反の買い食いしたのはたかだか数日前の事なのに、随分と時間が経ってしまったように思えてしまう。それだけ、この数日間が慌ただしかったという事なのだろう。

「……私もクレープにすればよかったかしら」

アサトとは逆側のベンチから、独り言のように呟いたのはカナコ・T・シングウジだ。ツバキを真ん中に、彼女から見て右側にアサト、左側にカナコという配置である。

「カナコさんはあまり、甘いものを食べませんよね」

「ええ。でも、あなた達を見ていたら美味しそうに思えてきたわ」

カナコはすでに食べ終えたホットドッグの包みを綺麗に畳み、じっとツバキの手元に視線を注いだ。

「えつと……あ〜ん?」

物欲しそうには見えないが、そういう事だろうと察したツバキは、自分のクレープをカナコの口元に差し出した。

「……私、そんなに物欲しそうな顔をしてた?」

「そんな事はありませんが……違いました?」

勘違いだったのかと、差し出したクレープをどうしようか迷っていると、カナコが躊躇いがちに顔を近付けた。睫毛の長さがはつきりと判るほどの距離で見ると、改めて彼女が美

少女である事が窺える。

派手ではないし、自己主張もしないのに、周囲に埋没してしまわない。静謐ながらも強烈な存在感を放つ、大輪ではなく一輪の花。同性で、付き合いも長いツバキですら、未だに見惚れてしまう。

カナコは無言で、ツバキが差し出したクレープを一口齧ると、やはり無言で元の位置に戻り、無言で咀嚼した。よくよく見れば、ほんのりと頬が赤く染まっている。『可愛い』というより『綺麗』と評される彼女のこんな姿を、微笑ましく感じないはずがない。

ちなみに、カナコとは反対の席から「キマシ……」という声がぼそつと聞こえた気がしたが、ツバキは聞こえなかった事にした。

——『行くか、封鎖区域』

まるで明日の天気を訊かれるような調子で、とんでもない事を言われた。ほんの数十分前の事だ。

アサトはゼヘナの人間ではない。それでも、封鎖区域が立ち入りを禁止されている場所である事は承知している。彼は規則を遵守するタイプではないが、だからといって無暗に盾突く事もしない。

思い悩む自分を見かねて言ってくれたのだ。嬉しかった。

それでゼヘナに居場所がなくなれば、地球に来ればいいとも言ってくれた。

カナコまで『ツバキと一緒になら、地球に行くのもいいかもしれない』と言ってくれたのには驚いたが、やはり同じように嬉しかった。

カナコの事は以前から姉のように感じていた。

アサトの事も、地球で出会った際、『お兄さんっぽい』と評した事があったが、そのイメージは今も変わっていない。

ツバキは一人っ子なので、兄や姉がいる感覚は判らないが、この二人がそうであったなら——そんな風に考えて、また嬉しくなるのだった。

優しい兄と姉に護られて、きつと自分は、甘やかされ放題のわがままな妹になっていただろう。

それはそれで幸せかもしれない。

「……………」

結局、答えは出せなかった。

アサトもカナコも、ツバキを急かす事はせず、回答を先送りしてくれたような形となった。

経済活動を再開した街をなんとなく歩き、休憩がてら軽く何か食べようとなり、こうして公園に三人で並んでいる。

空が高く、青い。

優しい陽の光が降り注ぎ、風で木々の葉がそよぐ。

〈ブレケース〉の脅威など最初からなかったと言われても信じてしまいそうな——のどかな雰囲気。

だが、実際には何も終わってなどいない。

ひよっとしたら本当の『終わり』が始まっているかもしれないのだ。

(それなのに……)

こんなに穏やかな時間を過ごしているのだろうか。

そんな罪悪感にも似た想いがある。

「——その髪留め、使ってくれてるんだな」

不意にアサトから向けられた言葉で、ツバキは現実に引き戻された。

「あ……はい」

サイドテールを結んでいる赤い紐。それは地球で彼に買ってもらったものだ。

「正直に言うと、使うつもりはなかったんです」

「うん……？」

アサトはツバキの意図を図りかねたのか、よく判らないといった顔をした。

「ずっと大切に仕舞っておくつもりでした。でも、せっかくなので……橘さんに見てもらいたくて」

実を言えば、今の今まで髪留めの事は忘れていた。家を出る際には、気付いてもらえるだろうかという期待と不安があった。だが、中央政府が封鎖区域への対応をしないという決定を聞かされ、それどころではなくなっていたのだ。

しかし——

(気付いてくれてたんだ……)

そんな事に浮かれていられる状況じゃない。

それでも、口角が上がってしまいそうになるのを抑えられない。

「そっか。いや、朝から気付いてはいたんだが、言えるような雰囲気でもなかったし、ま

あその、なんだ……良く似合ってる」

「っ!？」

そういう不意打ちはやめてほしい。

急にそんな事を言われてしまうと、まともに顔が見られなくなる。

「——そう。初めて見る髪留めだと思っていたけど、たちばな橘さんに買ってもらった物だったのね……へえ」

……………。

カナコの言葉に、空気が一瞬、硬直した——ような気がした。

普通だ。至って普通の口調である。怒りや悲しみがにじ滲んでいる訳ではない、いつも通りのこわね声音。

なのに、それが異常なプレッシャー圧力に感じられる。

「……………」

右に視線を向ければ、アサトの表情にも薄うつすらと緊張の色が見て取れる。彼もツバキと同様のプレッシャー圧力を感じているのだろう。

このまま視線を左に向ける勇気は彼にはないだろうし、ツバキにも、ありはしなかった。

(やってしまった……)

カナコは後悔していた。

時々こうして、思った事が口を衝ついて出てしまう事がある。

しかも、友人のミズキに言わせると、内容が『怖い』らしい。

自覚はない。

以前、まだ付き合いが浅かった頃、ミズキと食事か何かを一緒にしていた際、ぽつりと『今日で世界が終わればいいのに』と言ったら、可愛い猫の動画を見せてくれた事がある。

その時の彼女の表情は、妙に生なま温あたたかったのを覚えている。

何が悪かったのかは判らないが。

あの時、ミズキはちょうど今、ツバキとアサトがしているようなリアクションをした。硬直して、どう反応すべきか悩むような。

そんな事を何度か繰り返すうち、ミズキに言われたのだ。

言ってもいいけど、あたしだけにしておけ——と。

怖いから——と。

ミズキの言っている事がよく判らなかつたが、ようやく理解した。彼女だから普通に受け止めて——もしくは受け流せて——いたが、普通はこういうリアクションになるのだ。恐らく、先の発言はするべきではなかつた。

(どうしよう……)

ツバキとアサトに『怖い』と思われたかもしれない。

いや、思われただろう。それは先のリアクションが物語っている。

妹のように想っている少女と、実の兄かもしれない少年。

その二人から距離を置かれる事を想像して、カナコは気持ちが沈んでいくのを感じた。すると——

『——カナコよ、其方そなたはつくづく重たい女だな……』

不意に、女声を思わせる機械マシン・ヴォイス音が聞こえた。時代がかった口調で、機械にあるまじき呆あきれたようなニュアンスが含まれていた。

声はツバキの胸元にかげられたネックレス——黒い勾玉まがたまから発せられていた。

待機モードのツバキのMBデバイス（カグツチ）だ。

「……悪かったわね、重たい女で」

『うむ。大迷惑だ』

「……………」

『……………』

一触即発——とでも呼ぶべき緊張感が一人と一基の間に漂う。

しかしそれは、結果として先のカナコの発言で硬直した空気を弛緩しかんさせた。

『怖い』でなく『重たい』と言われたのは気になったが。

「カナコさんは、恋人の浮気を許してくれなきそうですね」

この流れで空気を変えようというのだろう。ツバキとしては珍しい話題を振ってきた。なぜ、そんな話題を選んだのかは判らないが。

「そうね——浮気相手を殺して、次に浮気した恋人を殺して、私も死ぬわ」

「あはは……」

この手の話題はよく判らないので、率直に思いついた、自分が取るであろう手段を挙げてみたのだが、ツバキの苦笑は引きつっているように見えた。

「……情熱的だな」

『……橘アサトよ、はつきりと言ってやれ。それが重いのだと』
アサトと〈カグツチ〉のリアクションも、やはりツバキと似たり寄ったりだった。
(……私、ひよっとして感覚がずれてる?)



今に至り、ようやく自分と他人の感覚の違いに気付いたカナコは、それを確認しようと同様なシチュエーションで取るべき対応を挙げていったが、それは彼等との溝を深める結果となった。

「……私、おかしいのね。知らなかったわ」

「カナコさん、ほんのちよつと違うというだけで、おかしくなんてありませんよ。みんなちがって、みんないい』——というじゃないですか」

「……ツバキの口から、そんなおたためごかしは聞きたくなかったわ」

もはやツバキの言葉すら届かないのか、どんよりとした表情でカナコは力なく言った。

『ふむ。重たいだけでなく、面倒くさい女だったか。これはいよいよ救えんな』

「〈カグツチ〉、カナコに容赦ないな……」

〈カグツチ〉とアサトの声に至っては、聞こえてすらいなさそうだ。

ツバキはなんとかフォローしようと言葉を重ねるのだが、カナコのネガティブは根が深いらしく、一筋縄ではいかないようだった。

「——俺の妹は無口でさ」

そつと嘆息して、アサトは言った。

「カナコみたいに寡黙な訳じゃなくて、内気で言いたい事を言えないタイプだったんだが……ひよつとしたら、自分が他人と違う事を知られるのが怖かったのかもな」

自分の感覚がずれている事を知られたくない。

『違う』ものは『みんな』の中にいられない。

『その話と今のカナコに、何の関係があるのだ?』

ツバキとカナコも〈カグツチ〉と同様らしく、きよんとした表情でアサトを見ていた。

「いや、別に。今のカナコを見てて、そうだったのかなって急に思っただけだ」

脈絡がなくてすまん——と、アサトは苦笑を浮かべた。

『然様か。時に——妹君の名は何というのだ?』

「え?」

『ただの好奇心だ。名くらい問題なからう?』

〈カグツチ〉の言う事はもつともだ。そんなに食い付く事ではない気もするが、さりとして、気を遣わなければならないような事でもない。やけにツバキとカナコの落ち着きがないのが気にはなったが。

「あ……カナコだ。橘 カナコ」

場が静寂に包まれた。

『ほう。私の知人にも重たくて面倒くさい同名の女がいるな。これは奇遇だ』

だが、それも一瞬。〈カグツチ〉はどこかわざとらしく、そんな事を言った。

『いい加減、はつきりさせてはどうだ?』

水を向けられた、件くだんの同名カナコの女は、俯うつむきがちで表情は見えない。

「〈カグツチ〉、なにも今でなくても……」

『今だからこそだと思うが? これから何が起こるか判らんのだ』

窺たしなめようとするツバキだったが、〈カグツチ〉の言う事にも一理あると認めているのか、強くは言えないようだった。

静まり返る一同。

誰もがカナコの発言を待っていた。

彼女はやや俯かくだきがちなまま、身体からだは正面を向き、視線は自分の手元に注がれている。

「……………橘さん、私——」

カナコがぼつりと呟つぶやいた直後——アサトの視界の端はしに強烈な光はしが奔はしり、わずかに遅れて爆発と衝撃波が発生した。

「……!?!」

正面に見えるのは二人の少女の背中。どちらも先ほどまでの私服姿ではなく、和服——〈機獣少女〉の戦装束いくさしようぞくであるMBジャケットまじを纏まとっている。爆発の規模の割りに衝撃が少なかったのは、彼女等が張っている防壁で護られていたからだろう。誰もが絶句していた。

目の前の光景に理解が追いつかないのはアサトだけでなく、ツバキとカナコも同じらしい。咄嗟とつさに反応てき出来たのはさすがだが、こんな状況は想定外なのだろう。

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十五話をお届け致します。

前回同様、ギリギリでした。忙しかった訳でも、さぼっていた訳でもなく、環境の変化に加え、執筆に適した環境がなかった事が原因です。

まあ、どうでもいい事ですね。

前回のサブタイトルが『アらしノマエノ』だったので、今回は静けさが終わる所まで書かねばと思った結果、TVアニメの第一話のラストにちらっと主役メカが登場する程度に、『静けさ』をぶち壊しました。

いっそ『後編』と付けて、今回まで地味なシーンを続けようとも思いましたが、自粛しました。アバンでバトルやったけど、短いしね……。

地味なシーンばかり書いていたい。

それでは謝辞で締めたいと思います。

今回もクラウやロゼットに関するチェックをお願いしている紙白さんに感謝を。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

次回、アニメ『ゾイド』でも猛威を振るった名前座が活躍！

2017 / 6 / 12 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る